

地域と歩むコミュニケーション紙

MIYAKO

Vol. 11 2016 春号

地域協議会だより



◆ 主な内容 ◆

地域自治区と地域協議会の役割…P2 / 各地域協議会の活動の様子…P2

地域協議会長のひとこと…P3 / 地域協議会委員名簿…P3

地域協議会 10 周年特集・座談会…P4

みんなの力で地域を創る～平成 27 年度地域創造基金事業の紹介～…P6

各地域のトピックス…P12

ふるさと再発見

漁師が守る森…P16

陸中真埼灯台

地域協議会長のひとこと

新里地域協議会長
中野 正隆



早いもので平成17年の宮古市、田老町、新里村の合併による「新宮古市」の誕生から10年が経過し、地域自治体に設置された地域協議会も節目を迎えました。

この間、地域自治体が目指す住民と行政が連携する協働のまちづくりの推進のため、それぞれの地域が抱える課題の抽出や協議、また住民の連帯と地域振興を図ることを目的とする地域創造基金事業の管理を行ってまいりました。

歴代の協議会長をはじめ委員の方々がこの地域協議会の礎を作られ、現在に至ったものであり、そのご労苦に対し敬意を表するものであります。

現在、新里地域では、4つの小学校の統合による新里小学校の開校や復興道路整備に伴う宮古・盛岡横断道路の整備並びに国道340号線と井内道路の改良工事が進められるなど、「ひとづくり」「地域づくり」の基盤・環境整備が行われています。

地域協議会も平成27年度より、新たな局面を迎えておりますが、今後におきましても、「地域連携の強化」と「地域の活性化」を目指して、充実した活動ができるよう委員全員で取り組んでいきたいと思っております。

宮古地域協議会長
細越 雅佐浩



合併に伴い、新しい宮古市が誕生して10年を迎えましたこと、誠に喜ばしい限りです。

この間、4地域自治体住民の互いの地域に対する関心・理解や交流は大いに深まったと感じています。あの東日本大震災から5年になりましたが、特にも地震発生時に宮古・田老沿岸被災地が途方に暮れている中、全国からの支援に先立ち、川井・新里地区の皆さんのいち早い心温まる献身的な炊き出しや救援物資搬送等の支援活動は本当にありがたく、「仲間の絆」を強く実感したところです。

今、大震災からの復旧・復興が全力を挙げて進められていますが、少子高齢化社会、人口減少社会をどのように克服していくか大きな課題が待ち構えています。そのためには若者の定住化が重要であり、地域基幹産業の振興、雇用の拡大、子育て環境の充実、基幹道路整備に伴う交流活性化等これからの新しい宮古のまちづくりにより一層連携して取り組まなければならないと考えています。

川井地域協議会長
伊藤 和榮



川井地域は平成22年1月1日に編入合併し、6年が経過いたしました。合併直後から地域協議会として地域の方々の意見を聞きながら判断しなければならない局面がありました。委員の方々の協力もあり何とか意見集約し、現在に至っております。また、東日本大震災では、地域が丸ごとになって被災された方々の支援に取り組み、地域の底力を感じました。

川井地域では、地区ごとに地域づくり委員会が組織され6団体が活動しています。この委員会を中心に、地域が目指す将来像を描くため、2年の検討期間をかけて「地域づくり計画」を作成しました。この計画を毎年度の活動に活かしているところです。そこに住む人たちの創意工夫によって地域活動が活発になり、健康で元気に暮らしていけるよう協力し合えることが地域の発展には重要であると感じています。

今後は、道路網の開通を見越して、川井の地域資源を活用した取り組みを行い、交流人口の増加や定住に結びつくよう地域協議会としても活動して参りたいと思っておりますので皆様のご協力をお願いいたします。

田老地域協議会長
林本 卓男



平成17年6月の新宮古市の誕生により、旧3市町村地域に自治体と地域協議会が設置されてから、昨年9月で10年が経過しました。田老地域協議会では6期10年間で33人の委員がその任にあたり、これまで延べ62事業67,737千円の地域創造基金事業の審査・採択の他、各種事業活動を行ってまいりました。

この間、大震災等により任期半ばで命を落とされた3名の有為な委員の存在を忘れてはなりません。

平成24年からの4期目以降は、大震災からの復旧・復興が当地域自治体においては無論のこと、協議会委員にとっても最重要課題となり、その難局に立ち向かい乗り越えるために全てのエネルギーを費やしてきたといっても過言ではありませんでした。

そのことが、地域協議会の果たすべき役割や活動に少なからぬ影響を及ぼしたことは否めず、腰を据えた本来の事業活動が充分でなかったと反省しているところです。

これからの2期4年間は、宮古市の復興計画が再生期から発展期へと移行します。今後とも当地域協議会に与えられた役割を果たすことができますよう、皆様のご支援・ご指導を宜しくお願い申し上げます。

地域自治体と地域協議会の役割

地域自治体とは、都市化の進行や合併により自治体の区域が広域化していくなかで、住民の意見を十分に反映させながら住民に身近な事務を行うために、地方自治法に基づいて設置される地域自治組織です。地域において自己責任と自己決定の原則を実現し、住民自治が重視されなければならないという考えによるもので、宮古市では、住民と行政が連携する協働のまちづくりを推進するため、旧市町村の区域ごとに設置しています。

地域自治体には地域協議会が設置されます。地域協議会とは、住民に基盤を置く組織として、住民及び地域に根差した諸団体等の主体的な参加と協働活動を通じて、多様な意見の調整、身近な地域づくりなどを行うものです。いわば協働活動の要となるものであり、地域自治体の核となるものです。このため、市町村長その他の市町村の機関からの諮問に対して意見を述べたり、必要と認める事項について市町村長その他の市町村の機関に意見を述べることが出来ます。

宮古市では平成17年9月に地域協議会が設置されました。

平成27年度各地域協議会の活動の様子

新里



新里地域協議会では、平成27年度及び平成28年度の地域創造基金事業の審査を中心に全6回の会議を開催しました。また、地域協議会の主催事業として、新里地域の住民が一堂に会し、より一層の連携を図り、地域の発展に寄与することを目的として新里地域新年交賀会を開催しております。

この新年交賀会は、旧新里村から続く新春恒例の行事となっており、合併後は、地域協議会が主催により事業を継続しているものです。

今年度は、平成28年1月9日に新里福祉センターにおいて、地域住民・団体及び関係者124名の参加をいただき、盛大に開催することができました。会場では、4月に開校する新里小学校の校歌と校章が披露されるなど、終始和やかな雰囲気の中で交流が深められていました。

宮古



宮古地域協議会では、平成27年度及び平成28年度の地域創造基金の審査のほか、市から説明された各種計画等について話し合いを行いました。

地域創造基金事業の審査では各団体の活動を応援しつつ、将来的に自立して事業を継続できるかどうか視野に入れて審査しています。

市が説明した宮古市公共施設再配置計画（実施計画）素案については、「どこに集会施設があるのか初めて分かった」「宮古市内で一律の基準ではなく、地域の実情に合わせていくつかの基準を設けた方が良いのではないかなど、様々な意見が出されておりました。

これからも、地域の声を行政に伝えていきたいと思っております。

川井



川井地域は旧小学校区によって6地区に分かれています。川井地域協議会では独自事業として、各地区で地域住民が将来自分の地域を住み良くするために、どうすればいいかを検討・協議して作り上げた「地域づくり計画」があります。

今年度はその地域づくり計画の補完事業として、交通安全施設点検を行いました。高齢化を迎えても安全に暮らしている環境にするため、街灯、安全柵、カーブミラーなどを点検し、外出が容易にできる環境を整える活動を行っています。

また、毎年GW前の日曜日には、一斉道路清掃活動を行い、環境美化活動も積極的に実施しています。こうした取り組みは、今後も継続し、協働のまちづくりを展開していきたいと思っております。

田老



平成27年度は、6回の地域協議会（4地区合同会議1回を含む）を開催し、地域創造基金事業の審査や、田老地区内の復興事業などについて、各事業担当部署との協議を行いました。

また、合併から10周年を迎えるにあたり、旧田老町の閉町記念事業として総合事務所の前庭に埋設されたタイムカプセルを開封する「閉町記念タイムカプセル開封式典」を行いました。

タイムカプセルに作品を入れた、当時の小中学生の代表12名で実行委員会を組織し、地域協議会委員はアドバイザーとして参加しました。式典当日はあいにくの雨模様となりましたが、作品を埋めた当時の子供達のうち約130名が集まり、掘り出された作品を互いに見せ合いながら、当時を懐かしんでいました。

地域協議委員名簿

<p>◆宮古地域協議会◆</p> <p>会長 細越 雅佐浩 副会長 坂本 みゆき 委員 佐藤 功・花館 孝次 澤田 亮・関川 和子 藏 美奈・伊藤工三子 佐々木智恵子 木村 守男</p>	<p>◆田老地域協議会◆</p> <p>会長 林本 卓男 副会長 吉田 恵利子 委員 大樺 賢作・小林 晃 前川久仁子・高屋敷 登 佐々木善政・鳥居 豊子 山本 悦治・鳥居 ゆみ</p>	<p>◆新里地域協議会◆</p> <p>会長 中野 正隆 副会長 中坪 政男 委員 大坊 敦子・佐々内 剛 古館 利彦・飛澤 愛子 山口 秀子・小山田壽子 佐々木一三</p>	<p>◆川井地域協議会◆</p> <p>会長 伊藤 和榮 副会長 中村 儀雄 委員 佐々木 登・古館 秀巳 木村 勇一・井畑 克雄 横道 廣吉・嶋津 茂子 坂本 久子 佐羽内百合子</p>
---	---	---	--



地域協議会 10周年特集

座談会 新たな街づくりの歩みを語る

出席者 金沢道子(宮古) 野中良一(田老) 矢崎誠一郎(新里) 伊藤和榮(川井) 聞き手 横道廣吉(編集長) 澤田亮(副編集長)

期待と不安の大同合併
スタート時は困惑も



金沢道子氏

司会 合併に伴ってスタートした地域協議会が10年の節目を迎えることから皆さんに当時を振り返っての感想を伺います。

金沢 合併協議会に出ながら合併とは何か？を学んでいったという感じでした。ただ最初の合併の時は、宮古の人も、田老・新里の人の感覚にしても、生活圏は同じなんだという土台でいいね。ただ住んでる所が違うというだけで、むしろ親戚関係とか交流はいつでもあるので、違和感は無かったです。でも、新里の方は住民サービスの低下という事を懸念しておられたように思っています。例えば、雪かきの車は今までと同じ様にすぐ来てくれるのか？とか。私は、デメリットを探すよりはメリットを探していった方が良さんじゃないか？っていうような事を申し上げたような気がしますね。

野中 地域協議会の初代は町長をやったお前がやれということでした。割とすんなりと合併して地域協議会が出来たが、相当不満もあるだろうなと思って、

事業の中で座談会の開催に取り組みました。「皆さん何か、ごさいませんか？」と各地を回りまわりました。今はもう、市役所が身近になってますが当時はそうでもなかったその隙間を埋めようとかがんばりましたが落ち着いたので、2年でやめました。また、合併した年は、雪が相当降りましたが、心配していた除雪が早く対応してくれて「合併して良かったな。」っていう声が増えて来ました。それだけは忘れられない事でしたね。

矢崎 新里では田老と同じように当時の山口村長が初代の会長につきましたがお亡くなりになってその後残任期間を飛澤議長さんが継ぎ、私はその後には会長に

震災対応に合併効果
森・川・海で連帯強化を



野中良一氏

司会 合併して間もなく大震災がありました。各地の状況について伺います。

金沢 全員が思ったと思います。

になりました。合併してそれまでの仕組みががらりと変わったので最初は戸惑いましたね確かに。地域協議会が出来たっていうか、この創造基金。これが旧市町村単位で1千万、年間1千万使えると。これが何よりの魅力でしたね。これで、まず賑やかな地域づくりができるなど。そう思いました。

伊藤 川井は5年遅れて、形は編入という形でドタバタと合併しました。今度は地域協議会を作って、それぞれの地域は自分達で考えなきゃならないと始まったわけです。そしてすぐ区界の住所表示の問題や投票所の統廃合とか、学校統合とかいう事で、慌ただしく5年過ぎました。その中で川井では各地域に復興センターを設け、地域づくり委員会を立ち上げて取り組んでいるところですよ。

「合併して良かった」って。合併してなかったら、宮古の人も田老の人も大変だったと思います。新里、川井の方に助けられたわけですね被災すると衣食住を失うわけですよ。あわよくば助かって、どうやって暮らしていったらいいかっていう、そういう面で支援に感謝しています。

野中 大変な中で、私が一番良かったのは、グリーンピアを取

威力発揮した基金事業
終了後に課題も



矢崎誠一郎氏

司会 合併によって展開されている地域創造基金事業について伺います。

金沢 お祭りだとか行事は地域にあったわけですが多くは担い手不足に直面していました。これを創造基金で活性化する効果はあったと思います。もう一つは「無いものから有るもの作る」という効果もあり、仲間内で小さくやっていった事も、もっと市民権を得るような、そういったイベントにする効果もあったと思います。一番苦労しているのは、事務局だと思っんですけどね。

野中 私はこれまでのイベントが合併した途端にダメになるっていう不安があったんですけど、それが創造基金によって、合併する前より充実したんではないかと思えます。運動会なんかも継続しているしね。蛙・あわびまつりも、「これは絶対無くされないぞ。」と今でも盛り上がりがあります。

得しておいたことでした。震災に関しては「施設を」自由に使えるたもんですから。ホテルを利用した者があれば、アリーナに避難した者もいた。そして仮設住宅もグラウンドに建てたから早かった。そういう事で本当にこの施設があつて良かったと思っただけです。

矢崎 震災直後の周囲は事業も何もやる気が起きない雰囲気でした。私は元氣な所がやらないで、誰がやるんだと事業実施を推進しました。学校との運動会、各学校も運動会はやらないと。そういう報告をしてきましたので、「いや、校長先生、元氣な所がやらないで、どこがやるの？」と。「こっちから元氣を発信していかなければ、災害にあつた方はもつと元氣がなくなつてしまふんだよ。」という事でやりました。

伊藤 震災後すぐに炊き出しに取り組みました。おにぎり包むラップが無くなつて郵便局に貰いに行つたりしました。電気がなくてもガス釜が使えたので米が底をつくまで10日ぐらひは支援に全力を挙げました。山に居るといってもいろんな繋がりがある方が浜のほうにもいますから他人ごとではなかつたわけです。

協議会事業に工夫も
バランスある活性化を



伊藤和榮氏

司会 今後へ向けて、課題とか期待などお願いします。

金沢 合併当時の事を後世に伝えていくのは大事だと思います。震災に加えて少子高齢化が進む中では今宮古に居る人だけを考えるのではなく、事情によってよそに住む人も帰ってこれるような企画を考えていただければいいなと思います。今やっていくことは宝で大事なことになるので、移り住んで来てくれたら、なおいなというぐらい

矢崎 新里全体でもその通りですけど、私の住んでる和井内では今までかつてないような賑やかな地域作りが出たかと思つております。ただ、地域々によってやはり、使い方や、スタイルは違いましたね。

伊藤 地域創造基金、1年間に1千万と言われた時には消化できるかな？という不安がありました。でもふたを開けてみると川井産業公社やNPOのかわい元氣社さんはじめ各地域で手を挙げてほとんど残り僅かという状況になりました。けれども、この事業は、継続してもあと5年という話ですからその後が課題になると思いますね。

の魅力です。作っていかなくさいいけないんじゃないかなと思います。

野中 合併した効果の一つに、震災後、田老の人たちは、「崎山地区をはじめ市内各所に住宅を再建し、お世話になつてい

ということがあります。田老でなくとも、宮古市全体に移り住んでいる相当の人がいます。本当の意味で宮古市民として暮らしていこうということです。でも田老の地区の高台も出来たので、それでやや、落ち着いていくのかなと思えますが市の中でどこに住もうがバランスよく合併効果を生かしていければいいなと思つてました。

矢崎 私から地域協議会について感じていることは、地域創造



澤田 亮 聞き手 横道廣吉

※この記事は平成28年2月5日に行われた座談会の内容を紙面の都合により要約して掲載しています。



みんなの力で地域を創る ～平成 27年度地域創造基金事業の紹介～

地域創造基金は地域住民の連帯強化や地域振興のための事業に活用されています。27年度は30事業が行われました。

宮古港開港400周年記念事業 第23回「海の日」宮古港カッターレース 実行委員会

7月19日、宮古市魚市場前の湾内で開催しました。過去最多の参加33チームにレース関係者を含め約600人が出席し、宮水太鼓と宮古海上保安署の展示水が開会セレモニーとして行われ華を添えていただきました。本レースは、長さ9mのカッターに14人が乗り込み、力と技と呼吸を合わせて競う。観衆の応援を受けながら頑張りました。

今年度は東京海洋大学、館山海上技術学校、小樽海上技術学校の3チームが参加し、エキシビジョンレースなど充実した内容となりました。各チームの技術も上達し緊迫したレースが展開され、多くの観衆が魅了されました。

カッターレースも宮古港開港400周年記念事業の1つとして行われ、「海のまち」宮古のPRと活性化に寄与し、出場選手間の交流も深まり、水産並びに海洋スポーツの普及・振興によって、明るく豊かなふるさとづくりの一翼を担うことが出来たと確信しております。



力と技と呼吸を合わせて

全国新選組サミット in 宮古2015

宮古港開港400周年という、一世紀に一度の記念すべき年に、この「宮古港海戦」をより多くの方に認知してもらい、より地域への愛情を深めていただくという想いから「全国新選組サミット」を宮古に誘致し(宮古港海戦では、新選組の土方歳三が宮古港で闘っています)、宮古港海戦をテーマとしたイベントや舞台を行いました。

市民の方も「ミスター土方歳三コンテスト」に参加し、楽し盛り上がりながら歴史を学んでもうりました。また、宮古港海戦が発生することになった背景や、そこに臨んだ人々の想い・生き様などを、舞台を観覧された方々に伝えることができたと思います。

結果として、「宮古港海戦」という歴史の一幕が、以前よりも認知されたと自負しています。激動の時代に起きた「宮古港海戦」。わずか30分ほどのその戦いは、まるで閃光のように、歴史の人に名を刻みました。私たちの活動も、多くの人に印象を残すことができたのではないかと思います。



舞台を終えて

宮古海戦組

東日本大震災復興支援プロジェクト 「歌の絆より強く! in 宮古」 辻ファミリアが宮古へ

辻ファミリア(辻秀幸氏、他3名)の御厚意により、東日本大震災復興支援プロジェクトとして平成24年から年1回岩手県内で合唱講習会及びコンサートが行われてまいりました。第4回目となる今回は、「歌の絆より強く! in 宮古」辻ファミリアが宮古へ」と銘打って、7月19、20日の2日間、宮古市民文化会館で行われました。

県内外から約250人の合唱愛好家が駆け付け、4人の先生方にコース別に「水のいのち」「ハレルヤコーラス」などの指導を受けました。19日夕刻に開かれた交流会では、宮古のゆるキャラ「サーモンくん、みやこちゃん」が登場。さらに辻ファミリアの余興「恋の山田線」にフロアはどっと沸きました。

20日の演奏会では、受講者による合唱発表会に続いて、辻ファミリアによる楽しく、美しく、そして愉快なステージが繰り広げられ、600人の聴衆は大満足のフィナーレは会場の皆さんと「夏の思い出」を斉唱し、盛会のうちに幕を閉じました。



辻秀幸先生指揮のもと、名曲「水のいのち」を、県内外の皆さんで熱唱しました

宮古の文化財を考へるシリーズ その5 「秋の夏屋路を往く」 思惟の会

8・00宮古駅前より大型バス3台で出発。「夏屋紅葉まつり」は残念ながら雨となるも紅葉の素晴らしさに感嘆の声しきりやまびこ産直館にて貸切で昼食↓中は同級生グループもあり笑い声も絶えず↓次のコースでは薄幸の歌人西塔幸子の一生を映像で見ることができたが、貴重な資料館を維持、運営している江繁の有志の方々に敬服↓北上山地民俗資料館も豊富な展示物に驚嘆。月泉和尚の里めぐりは横道様の名ガイドに引き込まれる。帰りのバスの中では、次はどこへ連れていってくれるかと問う声も多かったけれど...



北上山地民俗資料館

ピョンカフェスティバル

MIYAKO.Revolution21



1月23日(土)総合福祉センター健やかホールにて「第2回ピョンカフェスティバル」を行いました。カプラコーナーは、大人も夢中になり、段ボール・紙コップ工作コーナーは、身近な材料で思いきり遊べるので、昨年に引き続き大人気でした。メンバーによる紙芝居・シアタータイム、くらくらん・しゅがーさんのシアタータイムもあり、時間いっぱい楽しむ姿が見られました。市内の中学生・大人たちがボランティアとして参加して下さり、笑顔いっぱいイベントとなりました。

ウェルカムフラワーが迎える街並み創出事業

昭和通りのおかみさんもなりたい



ハンギングバスケット作成は、6月6日に宮古駅前広場において、宮古短期大学生、市民ボランティア、JR宮古駅と三陸鉄道職員、おかみさんの計30名、6月8日に宮古小学校において、4年生51名、6月23日に津軽石小学校において、4年生51名、6月23日に津軽石小学校において、3年生56名の計137名で作成しました。

バスケットの花はJR山田線の各駅ホームと三陸鉄道のホーム、宮古駅前広場や商店街、各小学校と津軽石中学校、宮古工業高校にも届けられ、開港400周年の記念に寄港したばいふいっくびいなす号のウェルカムフラワーとしてお客様をお迎えしました。

バスケットの花は、夏の暑さにも耐え、お客様をお迎える役目を果たしました。11月に入り、宮小と津小の生徒さん達は、自らバスケットの回収を行い届けてくれました。最後まで責任をもって行動する姿に、大変感動しました。ありがとうございました。

復興 冬のイルミネーション

宮古商工会議所青年部



市民の皆様から「楽しみにしている」という声を多くいただいたという、市役所前歩道橋のイルミネーション事業。今年も自分たちの手で作り上げようと、宮古商工会議所青年部会員他、22名が設置作業を行い、11月22日(日)から29日(月)まで点灯しました。

震災から復興する宮古に光を灯し、人々の心に明るさを持つていただけると開始したイルミネーション事業。今回は強風や大雪にも対応するよう、単管パイプを設置し、全面を強化しました。全長約70mの「光のアーチ」など、市民の皆様の期待に応えられるよう、昨年よりも電球の数を増やし、市役所前全体の数は7万5千球となりました。

復興に向けて力強く邁進する宮古を象徴するよう、想いを込めたイルミネーション。家族連れやカップルなど、多くの皆様にご鑑賞いただき、無事終了することが出来ました。

僕らの夏祭り

僕らの夏祭り実行委員会



僕らの夏祭りは、震災時に東京の大学生が、「被災地のために何かしなければいけない」「被災地の子供たちを元気づけたい」と赤前地区に来てくれたのが始まりです。今年度で5回目を迎えた僕らの夏祭りは、地域の方々のご理解・ご協力、さらには本基金の活用もあって、私たちの想像以上の以上、年々お祭りレベルが向上しています。地元住民や地元企業の方々による出演、地元で活動するグループによる演奏、子供みこしなどを楽しんでもらうことができました。

特に、夏祭りの最後を締めくくる赤前音頭では、地域住民のみならず夏祭りの参加者が一緒に踊りました。年を追うごとに踊りに参加する人数が増え、約200人が踊っている姿には、元気な街が戻ってきているなと感じさせられました。地域活性化の一助として活動していきたいと思えます。今後とも、僕夏(ぼくなつ)をよろしくお願います。

第50回音楽の夕べ

宮古市で交響曲を演奏する会



第50回「音楽の夕べ」

8月2日、震災後5年ぶりに市民文化会館大ホールでの演奏会を迎えることができました。

恒例の「きらきら星」からの幕開け。ミラーボールがきらきらとホール内を照らして演奏会の始まりを知らせてくれます。以前の気持ちに呼び戻された瞬間でした。

第一部は亡くなられた恩師を偲んでのプログラムです。第二部は独奏でビュータン作曲「ヴァイオリン協奏曲第5番イ短調第1楽章」。第三部は東京カワバグストリングオーケストラとSteinアンサンブルによる弦楽セレナーデ。第四部は宮古ジュニア弦楽合奏団を交えて合同でシューベルト作曲「軍隊行進曲第1番」他3曲を演奏しました。

第五部はストリングオーケストラと歌おうです。「語り合おう」「ハナミズキ」「ふるさは今もかわらぬ」の3曲を演奏しました。市内外の子供から大人まで老若男女が一同に気持ちをおわせて大合唱です。会場のお客様と一体感を感じることができました。

田老地区復興まちづくり協議会活動推進事業

宮古市田老地区復興まちづくり協議会

本協議会は、震災後の平成24年5月に、地域住民等で組織され、地区の復興に向け、安全・安心で暮らしやすいまちづくりを住民自ら考えるため、民間の任意団体として発足しました。

これまでの主な活動として、「高台まちづくり」及び「住居表示の導入」に関する提言書や「市街地まちづくり」に関する意見書を宮古市に提出いたしました。



意見交換会の様子

「LIGHT UP NIPPON」おらほの復興花火大会 WARDUKA
震災前は「おらほの夏まつり」として開催されていた花火大会ですが、震災以降は、LIGHT UP NIPPONと賛同者の協力により「LIGHT UP NIPPONおらほの復興花火大会」として毎年8月11日に開催しています。



松本哲哉ライブ

第69回田老地区体育大会

田老地区体育大会実行委員会

田老地区体育大会は、昭和21年に「戦後からの復興」をスローガンに第1回大会が開催され、以降ほぼ毎年開催されている歴史ある大会です。

第69回目の今大会は10月11日に田老一中校庭で行われ、時折小雨が降るあいにくの空模様にも関わらず、子供からお年寄りまで約700人が集い、競技への参加や選手の応援などで盛り上がりました。



地元住民VS事業者綱引き対決

たろう大漁まつり

たろう大漁まつり実行委員会

たろう大漁まつりは、昭和51年から「地域の伝統文化の継承と地域住民の幸せ」を願い、毎年5月に開催されてきました。

平成23年は震災により中止、平成24年から再開したものの、平成26年には諸事情により開催出来ませんでした。このような状況の中、地域住民から「もう一度震災前の大漁まつりが見たい、楽しみたい」との声があり、今回こうして開催することができました。



勇壮な曳き舟

末前・青倉地区交流事業

末前地区自治会

末前地区と青倉地区は隣接しており、2地区とも旧末前分校の学区であったことから、盛んに交流を続けていて、毎年秋には「末前・青倉地区大運動会」を開催しています。

今年度は9月20日に末前地区公民館グラウンドで行い、約50名が参加しました。両地区の子どもからお年寄りまでのほぼ全員が集い和気あいあいとした「縄な競争」や「パン食い競争」、「スティックボール」などの競技を楽しみながら親交を深めていました。



パン食い競争

新里地区生涯スポーツ推進事業

新里地区生涯スポーツ推進協議会

新里地区生涯スポーツ推進協議会では、誰もがスポーツ・レクリエーションに親しむことができるよう、年間を通して様々なスポーツ行事を開催しました。



ジャストミート(ソフトボールプレーオフ大会)

7月にはグラウンド・ゴルフ大会、7月から9月までナイターによるソフトボールリーグ、9月にはソフトボールプレーオフ大会、10月にはスポーツ・レクリエーション祭、11月には女性軽スポーツ大会、1月には、ビーチボールパレー大会を開催し、また、各地区でも、地域の特徴を生かした運動会などを開催しました。

地域の活性化を目的とし、地域活動の拠点である和井内ふるさと会館を会場に区民手づくりによる第14回和井内ふるさと収穫祭を11月1日に開催しました。当日は快晴に恵まれ、各テナントには、餅・饅頭・団子類をはじめ、野菜や米、リンゴ、きのこの地域で採れた新鮮な食材や小学生が学校農園で栽培したさつま芋などが、様々な品物が並びました。ふるさと会館内では、地元産そばを粉を使ったそば打ち体験や婦人会食堂の十割そばが来場者の人気を集め、特設ステージでは歌謡ショーやお楽しみ抽選会、餅まきが行われ秋の一日を満喫しました。



ハイポーズ

今後も魅力ある地域になるよう取り組んでいきたいと思っております。

閉伊川遊イング事業

閉伊川遊イング実行委員会

私たちは、恵まれた資源である閉伊川を活用し宮古市をPRするため、リバーパークにいとと地内において9月12日に川下り大会前夜祭花火大会、翌13日に川下り大会の二つの事業を予定しておりました。

しかし、9月10日からの台風及び秋雨前線の接近に伴い、開催日直前となって、会場となる閉伊川が大増水したことから、実行委員会では、苦渋の決断となりましたが、選手及び観客の安全を最優先し、事業の一切を中止することとしました。

閉伊川での川下り大会は、溪流ならではのスリルと爽快感が魅力ですが、近年の天候では危険も内包する大会であるとして実行委員会では考えています。

今後も選手、観客の安全を最優先に考えながら、魅力ある大会として運営して参りたいと思っております。

サマーフェスタにいとと2015

サマーフェスタにいとと実行委員会

サマーフェスタにいとと実行委員会は、「活力と魅力ある地域づくり」を目指し、新里地区の交流の機会として夏まつりを開催しています。



交流を深める会場の様子

平成27年度は8月1日に新里トレーニングセンター特設会場にて開催し、郷土芸能・交流カラオケ大会・ミニコンサート・大抽選会などを行い夏夜の楽しいひと時を過ごしました。

新里地区は高齢化や若年層の流出など、地域の活力が薄れている現状ですが、私たち実行委員会が活動を継続することにより、「魅力ある地域づくり」の一助になれるよう、今後も活動に取り組んでいきたいと考えています。

産直まつり(秋の大感謝祭)

和井内深山産直会

地域のコミュニティ形成と交流による地域活性化の場となるようにと平成23年から始めた深山産直も4年目の感謝祭を11月8日に開催することができました。



郷土料理に舌鼓

小さい店舗の中で活発に開店準備しているとお客様がたくさん訪れて来たので、開店時間を早めてのスタートとなりました。

今年度導入したパソコンにより手作り感のあるチラシ作りが容易になり、その効果もあつたか地域外の方々にもたくさん訪れて頂きました。3年目となったタコ焼きも好評で、お客様の笑顔を見ると、今後も皆様に喜んでいただける産直を続けていこうと改めて思った1日でした。

牧庵鞭牛周年祭

牧庵鞭牛周年祭実行委員会

道路開削の偉人である牧庵鞭牛の功績を永年にわたり顕彰していくため、昨年は牧庵鞭牛の生家跡地に東屋と掲示板を設置しましたが、今年度は6月21日に実行委員会を中心とした地域の方々の作業により、旧JR岩泉線と和井内駅脇に「牧庵鞭牛生誕の地」の案内標識を設置しました。



案内標識の設置作業

和井内地区では現在国道340号線の改良工事が盛んに進められています。地区内に建設される二つの橋について「鞭牛上の橋」、「鞭牛下の橋」と名称がつけられることになっており、牧庵鞭牛の功績を今後も顕彰して行きたいと思っております。



紅葉の中、歌謡ショーを楽しむ

第7回夏屋紅葉祭りを10月11日(日)夏屋地区の山の駅・峠茶屋「楓」の特設会場で開催しました。今回は天候にあまり恵まれませんでした。山々の紅葉も鮮やかに染まり、絶好のロケーションの中開催することが出来ました。ステージ上では、地元夏屋鹿踊りや民謡民舞ショー、歌謡ショーなどで盛り上げ、会場内では地元産の秋の味覚を楽しんでいただきました。また、会場側にハイキングコースを設定しちよっとした散歩や牧場への遊覧バスも運行し、自然とのふれあいや放牧牛の観察など紅葉が深まるなか心が癒される空間を楽しんでいただきました。来年度は、新しく前夜祭を計画し益々盛り上げていきたいと思っております。

夏屋紅葉まつり

夏屋ろばた塾



新鮮野菜の直売実践

27年度の活動は「高齢者生産野菜集荷販売」及び「サイクリング、トレッキング、ウォーキング体験モニターング」、「地域食材の新たな活用研究」を継続し、地域に眠る観光や食資源の掘り起こしを目指しました。集荷販売は販売場所の確保が重要であると感じました。モニターングとして実施したサイクリングコースの実証については、距離が短く、観光と結びつけるにはもう一工夫が必要です。今後は、基金事業としては行いませんがこれまでの経験を活かした活動を展開していきます。

川井の観光資源及び食文化の再発掘事業

森・かわい・海ネット

早池峰マラソン交流推進事業

NPO 法人かわい元気社

第5回早池峰マラソンを10月25日に開催しました。今年は峠コースが川井中学校から標高1068mの峠までを往復する30キロのコースとして行いました。折からの強風にも負けずに314名の参加者が健脚を競いました。ゲストには体操のオリンピック選手田中琴乃さんが参加し、スターター、表彰授与、トークショーなどで交流を深めました。この大会は標高差約800mの厳しいコースとして県内外の愛好者に親しまれ、国定公園早池峰山ろくの紅葉も人気を呼んでいます。



強風の中健脚を競う

踊りの里 OGUINI 振興事業

小国地域づくり委員会

今年度の踊りフェスタは、会場を閉校した旧小国小学校体育館に移して、11月29日に開催しました。目玉は地元出身メンバーのいる不来方高校音楽部の発表。日本一の合唱と多様なパフォーマンスに酔いれました。地元の神楽やよさこいなど高年齢の演舞に県内各地から訪れた参加者と共に秋の一日を楽しみました。当日は「小国の写真コンクール」やミニ産直コーナーもお目見えして「里の駅おぐに」の実現に心を合せていただきました。



風林火山と神風宮古流星海のみなさん



元気に泳いでね!

地域の子供たちの健やかな成長を願い、また、地区住民の連携を図る意味から掲揚場を整備しました。閉伊川に浮かぶ鯉のぼりの姿を目にすることで、癒しの空間にも繋がるものと期待しています。整備にあたっては、会員や宮古盛岡横断道の工事を施工している事業者からの協力をいただいで無事完成することができました。今後は、四季を通じて「鯉のぼり」「蛙のぼり」「イルミネーション」などの掲揚も行っていきたいと思っております。

鯉のぼり掲揚場整備事業

箱石地域づくり委員会



交通安全リレー、新聞を破かずに運べるかな?

10月4日、平成27年度川井地域大運動会を川井小学校グラウンドで開催しました。時々肌寒い風が吹く天候の中、川井地域の6地区が優勝目指して競技に参加しました。新種目に悪戦苦闘しながらも、和気あいあいと競技を楽しむ姿がみられました。また、復興道路の工事関係者の方々も各地区に加わっていただき新たな交流が生まれ、大いに盛り上がりました。今後も地域間の交流が深められるよう、事業を継続していきます。

川井地域大運動会

川井地域大運動会実行委員会

第27回閉伊川釣り大会

閉伊川釣り大会実行委員会

実行委員会では、今年度3つの事業を実施しました。「閉伊川釣り大会」では、ヤマメとイワナそれぞれ3匹計量で釣果を競い合い、「フライフィッシング体験」では、県外からの参加者に2泊3日コースでインストラクターや地元スタッフの指導や案内等によりフライフィッシングを満喫していただきました。「木の博物館体験」では、分館5号のハイマツ大群落を観察しながらの早池峰登山を夏と秋に開催しました。これらの事業は観光振興や地域活性化だけでなく、閉伊川の清流化や河川の環境保護の意識の向上、さらに参加型観光の創出による交流人口の拡大を図る事業となっております。



今年の釣果は?

江繋地区収穫感謝祭

江繋郷土芸能保存会

江繋地域では、各地区の世代間交流及び郷土料理の紹介を兼ねて収穫感謝祭を開催いたしております。日頃から地域の交流が少なくなってきた中、このような催しを地域振興センターと郷土芸能保存会が実行委員会を立ち上げて開催しています。味覚の秋を各地から持ち寄り郷土料理をお振舞いという形で感謝をしながら頂き、地元の郷土芸能や地域の郷土芸能を鑑賞し、「見覚」の秋にもしたいと考えました。特にも恒例となりました「あなたの早池峰ベストショット写真コンテスト」は、川井地域を様々な角度で捉えた写真が若手県内外からも出品して頂けるようになりました。

今年度は、11月15日(日)雨が降り肌寒い一日でしたが、沢山のお客様にお越しいただきました。郷土芸能のゲストとして、津軽石さん踊り保存会様を迎え華麗な踊りを披露して頂き、歌謡ショーのゲストとして宮古の歌姫・金沢未咲さん様を招いて収穫祭を盛り上げて頂きました。来場いただいたお客様も食べて・踊って・味覚の秋と、見覚の秋を堪能していただきました。来年度以降も、地区民一体となりこの催しを続けていきたいと思っております。



江繋早池峰神楽の演舞

オータムフェスタin区界高原

オータムフェスタin区界高原実行委員会

第1回オータムフェスタ区界高原は「区界で海と山を食おう」をテーマに10月18日に開催することが出来ました。当日は高原野菜販売や地元食材を使用したキノコ汁の振る舞い、物販コーナーでは被災地の企業様に参加していただき区界初の牡蠣の蒸し焼きの他、海の幸も盛り沢山! 遠野のどぶろくの試飲販売や茂市の鮎の塩焼きも好評! ステージでは宮古あばれ太鼓や童謡歌手の歌声も響き、宮古盛岡横断道安全協議会のコーナーでは重機の試乗などで賑わい、お楽しみ抽選会や餅まきでは大賑わいとなり、イベントを終えることが出来ました。区界地域の皆様の強力なバックアップもあり、目的でもあった地域ならではのイベントの開催、市内外の人々の交流も出来たこと、区界地域の皆様のイベント協力にただただ感謝! 今後も息の長いイベントにしていければと思っております。



区界高原に響く太鼓の音

田老地区の復興の様子について

田老



■三王団地の状況【H 28. 2.27 現在】

災害公営住宅や田老分署などの公共施設や電柱が立ち並び、個人の住宅建築もあちらこちらで始まりました。

東日本大震災から5年の月日が経過しました。震災直後は何もなくなってしまった田老の街並みも、この5年間で大きく変わりました。特にも、乙部地区の山を切り開き、新たに造成された「三王団地」は田老地区の復興の象徴ともいえるでしょう。そこで、今回は三王団地ができるまでを写真でご紹介します。

「田老まちびらき」記念式



三王団地がほぼ完成となった11月22日に「田老まちびらき記念式」が田老町漁協前の特設会場で開かれました。平坦部では土地区画整理事業も進み、住宅や商店の建設が始まっています。

式典には地区住民ら約300人が参加。これまでの復興事業の紹介の後、仮設住宅で活動しているグループが活動内容を紹介。「ゆいとり工房」代表の大棒レオ子さんは全国からの支援に対し感謝の言葉を述べました。

また、田老第一中学校3年の西川竜斗君が作文を披露。「将来を担う私たちが、安全安心なまちの実現に向け、できることをしていきたい」と力強く宣言しました。



【H 27. 2. 5 現在】

宅地造成や、道路整備などのインフラ整備が着々と進み、だいぶ団地らしくなってきました。眼下に見える街並みにも変化が。



【H 25.10.30 現在】

山が切り開かれ、田老の街並みが一望できるようになりましたが、団地には程遠い様子。これからどのように変化するのでしょうか。

「京の森プロジェクト」サクラがつなぐ架け橋

宮古



太閤しだれ桜(京都市醍醐寺三寶院)



宮古小学校での植樹の様子(H28.3)

京都市醍醐地域や京都市立醍醐小学校の子ども達が、世界遺産・醍醐寺の落ち葉をたい肥にし、そのたい肥を使って育てた「醍醐の桜」がすくすく育っています。
醍醐寺は、豊臣秀吉が贅を尽くした「醍醐の花見」を行った場所で、桜の花で有名です。その境内の中にある樹齢約150年の一本の桜「太閤しだれ桜」。秀吉が愛でた桜の子孫と言われるしだれ桜です。
住友林業が最新のバイオテクノロジー技術でこの桜からクローン桜を作り、その苗木を醍醐小学校の子ども達が大事に育ててきました。平成24年度から醍醐寺のみなさんや子ども達が宮古市にしだれ桜の苗木を届けてくれています。
市内では、臼木山、田老総合事務所、グリーンピア三陸みやこ、崎山小学校、宮古小学校に植樹されています。
今年度も、子ども達の手で、宮古小学校の校庭に新たな苗木が植えられました。



植樹後に開花した桜(臼木山)

小国写真コンクール



毎年11月開催している踊りフェスタに合わせて、小国地区を題材にした写真コンクールを行っています。人物や風景を撮影し、小国地区の良さを再発見しようとするものです。今年も、19点の応募の中から最優秀賞1点、優秀賞2点が入賞されました。毎年、多くの応募があり地元でも新たな発見があって楽しませていただいています。



最優秀賞「かっこいいね」 澤口健治 (宮古市)



優秀賞「輪になって」 広内健治 (宮古市)



優秀賞「祭りの帰り道」 湯澤隆弘 (宮古市)

江繫「第6回あなたの早池峰ベストショット写真コンテスト」



最優秀賞「白い花のある牧場」 杉本英雄 (盛岡市)



優秀賞「ミセス江繫」 澤口健治 (宮古市)



佳作「コバイケイソウの咲く頃」 菅原隆子 (盛岡市)



佳作「冬まじか」 山口光子 (宮古市)



この写真コンテストは、早池峰山を中心にその麓の風景を含め、様々な視点で自由な発想からご自身のベストショットを紹介するコンテストです。今年で6回目を迎え、すっかり定着した写真コンテストとなっています。今回は、30点の応募の中から最優秀賞1点、優秀賞1点、佳作2点が入賞しました。

藤田弘基写真コンテスト

第1回入賞作品



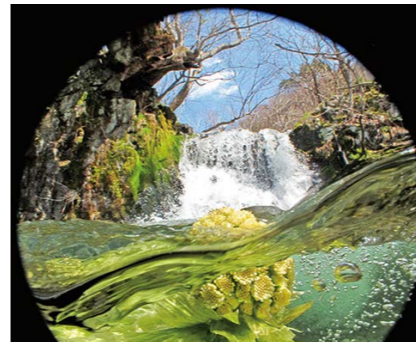
藤田弘基賞「銀河輝く浄土」 小和田真司郎 (宮古市)

この写真コンテストは、地域ゆかりの写真家「藤田弘基」氏の功績を顕彰するとともに、宮古市の豊かな自然、それに関わりながら生活する人々のやさしさ・強さ、または自然とともに生きる喜びを表現した作品を募集し、宮古市の素晴らしさをアピールすることを目的として開催されています。

藤田氏は、長年ヒマラヤの自然や文化の撮影を続けた山岳写真家であり、取材の間をぬって妻の童話作家・茂市久美子氏の生まれ故郷(旧新里村茂市)をたびたび訪れ、茂市を第二の故郷として、豊かな自然を撮影しました。

また、新里生涯学習センター「玄翁館」がオープンした平成17年から8年間に、宮古市の自然をテーマとした写真教室を開催し、地域の写真愛好家の方々へ宮古の自然と写真の素晴らしさを伝え続けてきました。

このコンテストは、今回で第2回目となり、宮古市が誇る豊かな資源である「森・川・海」の魅力表現した作品が数多く寄せられています。



優秀賞「清流に舞う」 岩谷 真 (宮古市)



優秀賞「復興のかけ橋」 阿部洋一 (宮古市)

第2回入賞作品



藤田弘基賞「浜の活気」 高橋 弘 (花巻市)



優秀賞「威風堂々」 阿部洋一 (宮古市)



優秀賞「待ち人」 野崎 仁 (宮古市)

漁師が守る森



「森は海の恋人」という言葉を聞いた方も多しと思います。森から流れ出した養分は、雨水や雪解け水に溶け出し、川を通じて海に運ばれます。海に注がれた森の養分は植物プランクトンを育み、魚や貝など多様な生きものが生息する豊かな海をつくり出します。1980年代後半、宮城県では海の水質が悪化し、危機感を抱いた地元の漁師たちが、海に流れ込む川の上流の山に木を植えました。これらの活動がきっかけとなり、国内外で漁師による植樹活動が行われるようになりまし

た。宮古市でも地元の漁師が植樹などを行い、森林を保全してきました。本州最東端に位置する重茂半島。三陸の豊かな海で獲れるワカメやコンブ、ウニ・アワビは全国屈指の水揚げ量を誇ります。海の恵みを育む重茂半島の森は、保安林や国立公園として保全されていますが、そこには重茂漁業協同組合を中心とした漁師たちの森を守る取組があります。



十二神自然観察教育林（巨木の森十二神）

十二神山の東に位置し、ブナを中心とした樹齢150年生以上の天然広葉樹林が広がっています。樹齢300年以上のケヤキや、直径1mを超すミズナラやトチノキ・クリの巨木、ムササビ、モモンガ、オオルリなどの野生の生きものにも出会えます。



○漁師が育てる森

重茂地区はもともと林業が盛んだった地域で、かつては多くの漁師が林業を営み、森と関わりながら生活していました。森が海を守るという考えから現在は重茂漁協が山を所有し、森の管理を行っている場所もあります。また、漁協が重茂川上流に分収林を持ち、多くの漁師が木を植えてきました。重茂地区では地域の財産として森が守り育てられています。

○森を守る精神の継承

1955年（昭和30年）、重茂漁協では海沿いの森を残すため根滝山を購入し、定置網のすぐそばに魚付き保安林を設定しました。保安林の中には民有林が多く含まれています。魚つき保安林とは、水面に森林の影が映ることなどで魚を集める効果がある森林や、海の生き物に栄養分をもたらしたり、土



砂が海に流れ出すことを防止するための森林のことをいいます。この魚つき保安林は日本特有のもので江戸時代からあり、森林は水産資源の保護のために重要であることが認識されていたようです。重茂地区では、古くから日本にある考え方を大切にし、森を守ることで海を守ってきました。

○十二神の森

重茂漁協では定置漁業が盛んで、1978年（昭和53年）からサケのふ化放流事業を行っています。ふ化場は、ブナを中心とした天然の広葉樹林の森が広がる十二神山の downstream にあり、重茂川を通じて運ばれた森の栄養分がプランクトンを育み、サケの稚魚のエサとなります。1975年（昭和50年）頃、十二神一帯の伐採が始まりましたが、漁協が中心となって市議会や国に十二神の森の保全を訴えました。1984年（昭和59年）、十二神は国の自然教育観察林となり、自然散策をおして子どもから大人までが森にふれあえる場として保全されています。

このように、重茂半島の豊かな森は漁師たちによって守られてきました。これから新緑の季節になります。ぜひ、重茂の漁師が大切にしている森に足を運んでみてください。